can

石原八束

随筆集

秋琴帖

皆美社刊

秋琴帖

著者　石原八束（いしはらやつか）

発行　昭和四十八年十一月十日　発行者　関口弥重吉

発行所　皆美社　東京都千代田区九段北三ノ二ノ一一

電話　東京二六四・三九〇五　振替　東京一四八〇二二

印刷　中央精版　製本　関山製本　定価　一、五〇〇円

目

次

年譜に憑かれてゐた人（附録）　井伏鱒二

花筐の詩人

鼾（いびき）　二

秋風記　一七

詩人の最後・三好達治　四八

銀座の河童　六三

バナナと牡丹杏　六九

余聞　七三

雪稜線　七八

一二句文章会　八三

牛島古藤歌　九六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

季語と王手　一〇〇
風狂の詩人三好達治　一〇四
自然に、充分自然に
猫　一二九
淡路女幻想　一三三
眼鏡　一三七
自然に、充分自然に　一四五
鵙たか　一四九
肥後守余滴　一五七
無縁　一六〇
映らないカメラの話　一六九

黄色い旗　一七五
墓の松風　一七七
柳沢吉保　一八一

風信帖

隼の目　一八七
雲の衣裳　一九三
はてしない存在　一九八
訣のわからぬ話　二〇一
隣は何をする人ぞ　二〇四
淀野さんのこと　二〇九
梶井基次郎文学碑他　二一二

伊部の擲弾筒　二七
蓼科高原　三二
白い風船こんにちは　三六
落葉ふる中で　三〇
あとがき　二四

装画　朝井閑右衛門

秋琴帖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

花筐の詩人

鼾（いびき）

狭い道路はその片側が道普請の最中であつた。そのまた半分の片側には、行きづまつてはのろのろ運行する自動車がざつと二十台はならんでゐたであらう。その自動車の、さう、真中くらゐのタクシーに乗りこんでゐた詩人三好達治と僕は、もう昏れかかつて薄暗い脇の、つまり工事をしかかつた片側を見るともなしに眺め乍ら、行きつ止まりつするのろのろ運転に、内心は業をにやしてゐた。工事で歩行も走行もかなはないと思はれたその片側を、しかし、そのときスーと音もなく、かなりの速さで走つてきたオートバイがあつた。

「あれ」

と詩人が、窓をかすめるやうに過ぎたその単車の無暴さに、驚いて声を発したときである。私どもの乗つた車の脇前方十メートル位のところに、こんもりと積みあげられた小石の山、——道路工事に使ふための小石の山に、その単車はあつけなくひつくりかへつて、頭を突こんで行つたのには、一緒にそれを見てゐた先生も僕も、再び、あつ、と言つて驚きの顔を見合せたものである。

立往生といつてもいい自動車の並んだ脇を、あれは、四十キロくらゐは出してゐたであらう。そんなスピードですりぬけて走り去ることなど、どだい無理な場所である。だから、これは当然と言へば当然といつてもいいやうな事故であつた。突こんだ単車はエンジンの音を立てたまま、横だふしにころがり、後の車輪が尻を空にむけたやうなカクカウで、空まはりに廻つてゐた。運転して来た人間は、と見れば、その小石の山の中腹に頭を突こんだまま動かない。立往生して居並ぶ自動車に乗つた人はかなりの数にはなるであらうから、ひとしく眼前で起きたこの事故に、声くらゐはあげさうに思へるのに、何やら無気味に息をのんだやうに静かである。むろん、往来の騒音まで止んだといふのではないが、その静かな一瞬の時間が何と長く思へたことであらう。

「行つてあげよう」

しばらくして、と、さう思はれたが、それはすぐさまのことであつた、詩人は僕をおしたてるやうにして、車をその場で下りた。現場の単車の尻には、大工道具のさしものや鋸が積んであつて、その無暴の怪我人は大工職人であることが知られた。小石の山の中に少しばかり頭を突こんだ当の大工は、しかし、抱きおこさうとそばによつてみると、酒の匂ふ赤い顔の、その口から血をたらして、まだとまらない単車のエンジンの唸りより、更に大きい高鼾を発して、意識もなく昏睡してゐた。

「大きい病院が近くにあるから、あそこへ運ばう」

と三好詩人は言つて、先に肩に手をかけ、僕を促すのだつた。

二十台もの自動車は、タクシーばかりではない、トラックも小型もまじつて一列行列に立ち並んだまま、それでも、他人ごとのやうにこちらをいつせいに眺めてゐるやうであつた。病院までの距離は、幸ひ、五六百メートルくらゐだつたが、重い怪我人を静かにはこぶのは、息がきれてたふれさうになるほどつらいことだつた。若い僕の方がさうだから、詩人の方は、と先生の顔を見上げると、先生も汗みどろであつた。そこへ誰やらが急報してくれたのだらう、病院から一人が担架をもつてかけつけてくれたから、あとはその人と僕とで担架をはこび、先生と、更にそこにかけつけた警官とがつきそつて、病院にかつぎ込んだ。医師が不在とかでその大病院での手当には手間がかかつた。途中から駆けつけて来たその警官は、怪我人の大工と僕とを同類か縁者かとみたのだらう。何も知らない僕に、

「酒を飲んだのですね、どこで飲んだのですか」

と詰問する始末で、汗だくの当方も、ただあきれるばかりであつた。ベッドに寝かされた怪我人は、しかし、先ほどより一層はげしい高イビキを、静かな室内にひびかせてゐた。とても助かる見込みは、素人目にも、なささうに見えた。医師が来て、手当はそれから手間がかかるといふことで、もう引きとつてもいいと婦長から言はれたのは、かれこれ一時間近くもたつた後であつたらうか。病院の入口の方に戻つてくると、その入口のすぐ横に置かれた長椅子の片隅に、三好詩

人はちよこんと腰かけて、僕を待つてゐてくれた。
帰りにまた拾つたタクシーは、今度はどうやらのろのろ運転をすることもなく走つた。三好詩人の止宿先の門前にさしかかるころ、詩人は、
「あれではとても助かるまいね、ムチヤをするねこのごろの人は……」
と、ぽつんと言つたまま車を降りた。肩をすぼめるやうにして門をくぐり乍ら、
「ぢや、さよなら」
と声を残して奥に消えた。さよならは祈りの言葉のやうに聞えた。

それからすぐまた二、三日してのことである。三好詩人と僕とは、渋谷の六兵衛ずしのとまり木の椅子に並んで、いつものやうに飲んでゐた。
「坂口安吾はえらいね、君知つてゐるかい、昔あいつはね、寒いのに取手の大河に裸で飛びこんで、土左衛門を担ぎあげてきたんだよ」
酔つたロぶりで、いきなり詩人はそんなことを言ひだした。やはり二、三日前の大工の怪我人のことを思ひ出してゐるらしい様子であつた。
「安吾はきつぷがいい」といふ言葉を度々口にされながら、話柄は安吾論から、三好詩人の三国時代のことにも飛び、越前福井の殿様、『忠直卿行状記』のことに移つたりしたのは、この殿様

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com